

## 1月25日（日）サムエル記第一17章55～58節

「あなたのしもべ、ベツレヘム人エッサイの息子です。」（58節）

55節を見ますとサウルは、「アブネル、あの若者はだれの息子か」と尋ねますが、アブネルも知りませんでした。このサウルの質問は、彼がダビデのことを全く知らないかのような印象を受けますが、ダビデは、すでにサウルの前で豎琴を演奏してサウルを喜ばせた経験があり、31節でサウルはダビデを呼び寄せたことにより二人は会っているはずですから矛盾していると主張する人たちがいます。そのことについては、いくつかの説明が可能ですが、まず一つが、サウルはダビデがゴリアテを倒したことが信じられなかったのではないかと考えられます。つまり、サウルからすれば、あれは私の知っているダビデなのか、信じられないという感じでしょうか。さらにもう一つは、サウルがダビデの名ではなく、「だれの息子か」と尋ねているところに着目して、25節で「その父の家にイエスラエルでは何も義務を負わせない」と褒美を与えることを約束しているので、「だれの息子か」すなわち、どこの家の者なのかということを探っていると言う人もあります。いずれにしても決して矛盾ということではないことは、ご承知おきください。聖書に矛盾ということは決してありません。

ダビデはゴリアテの首を手にして帰ってまいりました。まさにペリシテに大勝利をしたことによる凱旋であり、ダビデはイスラエルを勝利へと導いた立役者でした。そのダビデに対してサウルは直接「若者よ。おまえはだれの息子か」と尋ねます。するとダビデは「あなたのしもべ、ベツレヘム人エッサイの息子です」と言ったのです。ここでダビデは、自分の家を「あなたのしもべ」と呼ぶことで王に忠誠を誓っています。ダビデは、すでにサムエルから油注がれていて、ゴリアテにも勝利したにもかかわらず、彼には決しておごり高ぶる様子は一切ありません。むしろ謙遜に王に忠誠を誓っています。私たちは、物事がうまくいった時には、おごり高ぶりやすい者であることを思わされます。むしろ物事がうまく進めば、すべての栄光を主にお返しして、主の御前にへりくだる者とならせていただきましょう。

## 1月26日（月）サムエル記第一18章1節

「ダビデがサウルと語り終えたとき、ヨナタンの心はダビデの心に結びついた。ヨナタンは自分自身のようにダビデを愛した。」

サウルと語り終えたとき、ヨナタンの心はダビデの心に結びつきました。ここでの結びつくと言われている言葉は、分かちがたいほどに献げられているとの意味があります。ヨナタンは、ダビデが徹底的に主に信頼していること、そして主への信仰をもって果敢にゴリアテに戦いを挑み、ゴリアテに勝ったことを知ることで彼は大いに心を動かされたことでしょう。また「自分自身のようにダビデを愛した。」とありますが、ここで愛したと言われている言葉は、男女間の愛、主人と奴隷間の愛、イスラエルに対する神の愛、抽象的な概念に対する愛など、広範囲に用いられる言葉です。ですから、この場面をヨナタンとダビデは同性愛者であった証しとして取り上げられることがあります。決してそこまで言うことはできませんし、むしろ最初に説明しましたように、二人の心が主への信仰によって結びつけられていることから、互いの間の愛を伴うような神への信仰から生まれた深い友情が築かれたと解釈すべきでしょう。

私たちは、教会の兄弟姉妹の間で心がしっかりと結びついているのでしょうか。それは教会に来ていれば自ずとそうになるというものではありません。むしろ深い交わりの中で生まれるものです。私が学生時代に一人の兄弟が教会に導かれ、その後洗礼の恵みにあずかりました。その彼といつも飽きることもなく信仰の話をしていました。彼の言葉に私も信仰が大いに励まされ、そのことが私にとっての大きな喜びであり、楽しみであり、彼との交わりは私にとって貴重な時でした。まさに彼と私の心は互いに信仰によって結びつき、そして

主を愛する愛をもって私たちは互いに愛し合っていました。主の与える愛は、人の心を喜ばせ、人の心を楽しませ、そして信仰を励まし、信仰を強めるものであると思わされます。そのような愛が互いの間で育まれていますか。

## 1月27日（火）サムエル記第一18章2～5節

**「ヨナタンは自分自身のようにダビデを愛したので、ダビデと契約を結んだ。」（3節）**

3節を見ますと、ヨナタンは愛に基づいた契約をダビデと結びます。そして、この契約は個人間における互いの忠実さを表すものであったと考えられます。4節で「ヨナタンは着ていた上着を脱いで、それをダビデに与え」ました。この行為を権威の移譲と説明する人たちもあります。つまり、本来であれば、次のイスラエルの王は、サウルの息子であるヨナタンのはずですが、ヨナタンが自ら王位をダビデに譲ったというのです。しかし、そこまで言えるかどうかは疑問です。むしろ、ここでのヨナタンの行為は、ダビデへの愛と尊敬から出たものとして解釈すべきでしょう。次の「さらに剣、弓、帯までも彼に与えた」というのも、ゴリアテを倒し、ペリシテを打ち破ったダビデへの愛と尊敬から出たものと思われまます。

2節には、「サウルはその日、ダビデを召しかかえ、父の家に帰らせなかった」とありますが、ここを解釈してダビデはサウルに仕えることとなり、もはや父の家に帰る必要がなくなったと言う人もありますが、そんな単純なものではなく、津村師が解説していますように、むしろ父親から王の権威をもって息子を奪い取ったと考えるべきです。ですから、エッサイの手からダビデを奪い取ったとか、ダビデを父の家に帰らせようとしなかったとの意味があります。

ここにヨナタンとサウルの対照的な姿があります。それは、ダビデを愛し、契約を結び、上着や剣、弓、帯までも与えたヨナタンと、王の権威を持ってダビデを父の家に帰らせず、ダビデを自分のもとから決して離そうとしなかったサウルのそれぞれの姿です。与える者なのか、握りしめる者かの二種類に人は分けられます。私たちはいかがでしょうか。私たちは、与える者か、握りしめる者かのどちらでしょうか。

## 1月28日（水）サムエル記第一18章6～9節

**「サウルは、このことばを聞いて激しく怒り、不機嫌になって言った。「ダビデには万と言ひ、私には千と言う。あれにないのは王位だけだ。」（8節）**

6節に「皆が戻り、ダビデがああペリシテ人を討ち取って帰って来たとき」とありますので、17章54節に話しが戻ったと説明されることがあります。しかし津村師は、ダビデの人間関係に着目します。つまり、18勝1～4節までは、ヨナタンとダビデとの関係であり、6節からはサウルとダビデの関係が語られます。そう考えますと、17章55～58節と18章6節がつながっているとも考えられます。

イスラエルのすべての町において女たちは楽器を持って、喜びつつ、歌い踊りながら出て来て、凱旋將軍としてサウル王を迎えました。そして女たちは笑いながら歌い交わして、「サウルは千を討ち、ダビデは万を討った」と言いました。これは決してサウルとダビデが討ち取った敵の数の比較ではないはずで、実際に女たちは戦場でサウルとダビデがそれぞれどれだけの敵を討ったかということは知らないからです。むしろ、サウルとダビデがともに途方もないほどの多くの敵を討ったと、ほめたたえているということです。冷静に考えれば分かりそうなことですが、サウルは、このことばを聞いて激しく怒り、不機嫌になりました。私たちも自分自身を顧みるなら、どれほど人の言葉に影響されやすいものだろうかと思わされます。人の言葉に過敏に反応し、それによって怒ったり、不機嫌になったりすることはないでしょうか。人の言葉を勝手にネガティブに受け取り、それによって落ち込んだり、心の平静を失ってしまうことはないでしょうか。人の言葉に振り回さ

れるよりも、主にある信仰により常に心に平安を保ちたいと思わされます。それとともに私たちは主にあつて健全な人間関係を築いてまいりたいと思わされます。サウルのようにではなく、ヨナタンのように周りの兄弟姉妹に接することができるよう祈りましょう。

### 1月29日(木) サムエル記第一18章10, 11節

**「その翌日、わざわいをもたらす、神の霊がサウルに激しく下り、彼は家の中で狂いわめいた。ダビデはいつものように豎琴を手にして弾いたが、サウルの手には槍があった。」(10節)**

10節において問題となってくるのが、「わざわいをもたらす、神の霊」です。新改訳第二版までは「神からの悪い霊」と訳されていて、新共同訳も「神からの悪い霊」ですが、新改訳聖書においては第三版から「わざわいをもたらす、神の霊」に訳が改められました。主は悪い霊も良い霊も送られるのかとか、悪い霊と良い霊が別の神からそれぞれ来る多神論的な表現なのかとか、もし神からの霊が悪いものなら、神の性質にも悪が存在するのかなど、さまざまな議論がなされてまいりました。その中であつて津村師が翻訳上の問題として、神の霊は、わざわいをもたらすという聖なる神のさばきの目的を実行する神の霊であつて、人間にとって悪しき結果をもたらす霊ではあるが、それ自体が悪であるような霊ではないと説明しています。

(Exegetica8 p1-7) ですから新改訳の訳も「神からの悪い霊」から「わざわいをもたらす、神の霊」に変更されたものと思われまます。

それによりサウルは、家の中で狂いわめきました。そのようなサウルをなだめるために、ダビデはいつものように豎琴を手にして弾きましたが、効果はなく、サウルはダビデに槍を投げつけます。先ほども記しましたように、サウルに激しく下ったものは、「わざわいをもたらす、神からの霊」ですから、人の力ではどうすることもできなかったことでしょう。神からのさばきは多様なかたちで現れますが、まさにそれは人にとってはわざわい以外の何ものでもありません。私たちはイエス様の十字架により神からのわざわいを免れ、わざわいから守られている恵みが与えられていることに心から感謝しましょう。

### 1月30日(金) サムエル記第一18章12~16節

**「主が彼とともにおられたので、ダビデは、行くところどこでも勝利を取めた。」(14節)**

12節にサウルとダビデの対照的な姿が描かれています。それは、「主がダビデとともにおられ」と言われている一方で「サウルを離れ去られたからである。」と言われています。主が離れ去った結果、まず「サウルはダビデを恐れ」るようになりました。その恐れの結果として「サウルはダビデを自分のもとから離し、彼を千人隊の長にした」とあります。もともとダビデは戦士たちの長でしたが、(5節)彼を千人隊の長に格下げしました。(13節)ダビデを戦いに出させることで彼の顔を見ないですむようにということだったのかもしれないし、ロングという学者は、規模の小さな隊を率いることでダビデが戦死する確率を上げようとしたのではないかと、そのように小さな隊を率いることで人々の注目度を下げようとしたのではないかと、いくつかの興味深い可能性を主張しています。

次に主がともにおられたダビデについては、「ダビデは兵の先に立って行動し」ました。そして行くところどこでも勝利を取めました。15節には「彼が大勝利を取めるのを見て」とあります。さらに「イスラエルもユダも、皆がダビデを愛した」とあります。このようにして比べてみますと、主が離れ去ったサウルと主がともにおられたダビデの間には大きな違いがあり、主がともにおられたダビデの歩みは、まさに主が豊かに祝福してくださった歩みであつたと言えます。これまで見てきたことから分かりますように、もし私たちが主

がともにおられるような歩みをしたいと願うのであれば、私たちも主がともにご一緒するように歩まなければなりません。そのような歩みが私たちにはできているでしょうか。

### 1月31日（土）サムエル記第一18章17～19節

**「サウルは、自分の手を下さないで、ペリシテ人に手を下させよう、と思ったのである。」（17節）**

「あれを討ち取る者がいれば、王はその人を大いに富ませ、その人に自分の娘を与え、その父の家にイスラエルでは何も義務を負わせない」（17章25節）とサウルは約束していましたので、ゴリアテを討ち取ったダビデに対してサウルには果たすべき約束が残っていました。それで、「これは、私の上の娘メラブだ。これをおまえの妻として与えよう。」と言います。本来であれば、ゴリアテを討ち取ったダビデにすぐにメラブを与えるべきでしたが、なおも「ただ、私のために勇敢にふるまい、主の戦いを戦ってくれ」と言います。それは、サウルが、自分の手を下さないで、ペリシテの手によってダビデを葬り去ろうと考えていたからです。つまり、サウルは自分の娘との婚姻を利用しながら、ダビデが戦死することを願っていたのです。ここでサウルは大きな間違いをしています。それは、ゴリアテをダビデが倒すことができたのは主の助けがあったからであり、主によってダビデはゴリアテを倒すことができたのです。そのダビデをペリシテ人が戦死させることなどできるはずのないことでした。19節を見ますと、サウルはメラブをアデリエルに妻として与えました。サウル自身がダビデと姻戚関係になることを拒み、義理の息子となるダビデに王としての地位を脅かされると思ったのかもしれませんが。しかし、サムエル記第二21章8～9節を見ますと、メラブは五人の息子を産みましたが、彼らは悲惨な最期を遂げることとなりました。恐らくアデリエルには王の娘と結婚する資格がないことが分かっていたとは思いますが、それよりもサウルの主を恐れない態度が後々大きな悲劇をもたらすこととなったとも言えます。

ダビデは、18節で自分の出自や家柄を理由にして王の婿になることを拒みます。普通であれば論功行賞であり、王の姻戚関係になることは大きな誉れです。しかし、ダビデはそのようなことに決して心が揺れ動くことはありませんでした。これこそ、主がともにおられる者の歩みです。主がともにおられる者は、どこまでも謙遜であり、常に謙遜に物事を考えることのできる人なのです。